文　化

沖縄最後の追い込み漁

◇宮古島のサンゴ礁の海「友利組」の記録20年◇　大浦　佳代

沖縄県宮古島北端の狩俣の海は、潜るたび色を変える。潮の満ち引きや風、海底のサンゴや砂の移ろいがその表情をつくる。この海に、産業として行われている沖縄で最後の追い込み漁がある。海の狩人たちの記録を始めて20年たった。

大学卒業後、出版社に就職して夜は写真学校に通った。3年で退職し、南アフリカのアパルトヘイトなどを追った。その後に引かれたのが漁業だった。海が大好きなうえ、島国の日本にとって港は世界への扉であり、豊かな恵みを受け取る食の基地でもある。支える人たちにも興味を抱いた。

ダイビングのインストラクターの資格をとって訪れた宮古島で「狩俣に追い込み漁を続ける人がいる」と聞き、訪ねてみた。そこで出会ったのが、友利組の親方歴65年の友利哲雄さん。海で生きるすべを備えた大きな人柄と、初めて体験した追い込み漁の魅力に引き込まれた。そして現場に通って記録することが私のライフワークとなった。

友利組は漁船2隻に10人前後が乗り込み、素潜りで魚を網に追い込む。6月から11月ごろ、海が良ければ漁に出る。サンゴ礁には魚の「けもの道」があるという。追い込み漁は、サンゴ礁の地形や潮汐、潮の流れなどを読み切って、けもの道に網を張る。張る位置や角度を誤れば、魚は簡単に逃げてしまう。

初めて同行した日の衝撃は今も残る。素潜りの危険と、魚の必死さ。人間も生態系の一部だと実感し、海へのまなざしが変わった。宮古の美しい海でこんな厳しい世界が広がっていたのか。漁師はまるで海の狩人のようだ。人と海が身体的に結びつき、魚の命と自分の命がフェアだと感じた。

沖縄の追い込み漁は、島特有の複雑なサンゴ礁の地形が深く関係する

沖縄で追い込み漁が生まれたのは明治の中ごろだ。効率的で画期的な漁法として100人規模の組がいくつもできるまで発展した。その後、海外にまで出るほどの勢いとなり、追い込み漁はカツオの一本釣り漁と並ぶ沖縄を代表する漁業となった。しかし、1970年以降は遠洋漁業や沿岸のマグロ漁業、養殖業などへの転換が進み、追い込み漁は消えていった。友利組の漁師も現在はモズク養殖が経営の柱だが、哲雄親方の情熱で追い込み漁が続いている。

追い込み漁でしか捕れない魚は多く、友利組にはサンゴ礁の食文化を守る役割もある。漁に出た日の昼下がり、狩俣漁港には、魚屋さんや、新鮮な魚を食卓に並べたい人らが集まる。漁師が港で直売する「浜売り」が目当てだ。アイゴやブダイ、色とりどりの多様な魚が並ぶ様子は、まるで熱帯魚のお花畑のよう。ここでは、誰もが手に取りやすい値が付けられ、余った魚は漁師たちで持ち帰る。海の恵みを平等に分けるという感覚も、この漁を支えてきた。

ほかにも、友利組には漁師の「海学校」という役割もある。宮古ではチームの漁業は追い込み漁のみ。友利組は若者や移住者も受け入れ、海で生きるすべを伝えてきた。さらに長年、地元の狩俣中学校で追い込み漁の体験学習も行っている。

87歳の哲雄親方は今も現役だが、世代交代の時期にある。私は追い込み漁は終わるとは思っていない。海を読み、仲間を信じ、自然と折り合いをつける知恵は、形を変えて残るはずだ。そんな願いを込めて、宮古島に通った20年の記録を「沖縄最後の追い込み漁」という一冊にまとめた。

近年、狩俣では若い世代が島の自然や文化を学び、伝える活動に携わり始めている。彼らの胸中には、友利組の姿が確かに刻まれているはずだ。

（おおうら・かよ＝海と漁の体験研究所代表）